

---

**それでも僕は君を想う。**

来々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それでも僕は君を想う。

### 【Nコード】

N5732B

### 【作者名】

来々

### 【あらすじ】

どんなに好きな人でも、いつか忘れる時が来るのかもしれない。  
でも僕は、君の事をずっと好きでいたい。      恋人達が、永遠の  
愛を誓う話。

若年性アルツハイマー病

脳の細胞が萎縮して起こる記憶障害。老人痴呆等と症状は似ているが、アルツハイマー病はその症状の進行が速い。

「……………だそうです。」

「だから何よ？さつきから訳わかんないよ。」

「……………いや、だからつまりね？……………オレこの病気になったみたい……………」

「……………マジ？」

「……………うん。」

病院の帰り道、大学終わりの彼女と……………、早苗と一番最初に交した会話はこんなにあっけなかった。

「それで？良ちゃんは何がしたいの？」

「えっ？」

「その事を私に話して、良ちゃんはどつするつもりなの？」

「……えつと……。」

そうだった。

早苗はこんな性格だった。

早苗と俺は、物心がつく前からいつも一緒にいた。

まあ、簡単に言つと幼なじみってヤツだ。

保育園、小学校、中学校、高校と、全てが一緒。おまけにクラスもずっと一緒だった。

「くされ縁」  
というヤツか。

だが、

早苗はいつも俺より一歩前を歩いていた。

早苗いつも俺より大人だった。

小学生のとき、俺達はおつかいをたのまれて、二人で近所のスーパーマーケットに行った。その帰り道。少し格好をつけて、

「早苗ちゃん、重そうだから、僕が持つよ。」

「いいの？本当に重いよ？」

「大丈夫だよ。僕だって男なんだから。」

これがいけなかった。荷物は、俺が思っていた以上に重く、当時の俺は、直ぐに疲れて、道に座って泣き出してしまった。

「……………早苗ちゃん。もう歩けないよ……………」

「ほら、だから言ったのに。いいよ良ちゃん。今度は私が持つよ。」

「……………嫌だよ。」

「どうして？」

「……………だって早苗ちゃんは女の子じゃないか。……………女の子には優しくしろってお父さんが言ってたもん。」

「でも、重くて歩けないんでしょう？」

「……………でも、嫌だ。」

そしたら彼女は、少し怒った声でこう言った。

「じゃあ良ちゃんは、何がしたいの？」

小学生の僕は、酷くバカで。

小学生の早苗は、酷く大人だった。

結局、荷物を二人で半分ずつ持って帰った。

この時から彼女の口癖は、

「何がしたいの？」  
になった。

そんな俺達が付き合い始めたのは、高校一年生の時。しかも、告白したのは早苗のほうだった。

八月の暑い日だった。

その頃の俺達は、部活に生徒会と忙しく、一緒に帰った試しがなかった。

……まあ、恥ずかしさもあったのだが……。

それなのに、この日はどうしてか、一緒に帰る事になった。

久しぶりに並んだ二人の背中。

無言で歩く夕暮れ。

少し気まずさを感じたその時、早苗が唐突に俺に話しかけて来た。

「良ちゃんとうして帰るの久しぶりだね。」

「あ、うん。」

「良ちゃん、いつの間にか私よりずっと大きくなったね。」

「まあ、男だからな。」

「何か聞いた事ある言葉だね。」

「……………何が？」

「『男だから』ってヤツ。ねえ、覚えてる？」

「……………あれは、……………忘れてくれ。」

「あはは。……………あんなに小さかった良ちゃんが、もう大人の男になるなんてねえ。」

「まだ、俺なんてただのガキだよ。」

.....

再び二人に沈黙がおとずれた。

なんとなく横を向いてみると、  
なるほど確かに、早苗は俺よりもずっと小さかった。

久しぶりに並べた肩は、高さが不揃いで、なんだかおかしかった。

しばらくして早苗と目が合った。

慌てて目を反らした俺に、早苗は緊張した面持ちで話しかけて来た。

「..... ねえ、良ちゃんってさ、..... 彼女とかっているの？」

なんとなく『告白』だと感じた。

「いや、いないけど？」

「そうなの.....。」

「だから何だよ？」

わざとジラして見た。

そうしたら早苗は、顔を真っ赤にしながらかう言った。



「良ちゃん……。私と付き合ってくれない？」

「えっ？」

一応、驚く。

そして、まだ真っ赤なままうつ向く早苗を見た。

小学生の頃を思い出し、早苗に守られてばかりだった自分を見た。

今の早苗の身体は酷く小さくて、

今の俺なら、今度こそ守れる気がして。

気が付いたら、早苗に抱きついていた。

驚いた早苗の顔は、恥ずかしさで、もう蒸発しそうな位、赤かった。

「ちょ、ちよっと、良ちゃん!？」

「早苗、お前いつの間にかこんなに小さかったのか。」

「良ちゃん!？何がしたいのよ!？」

「早苗。俺は今度こそ守りたい。お前の事を守りたい。」

「……………良ちゃん。」

「…………早苗、俺もお前の事が好きだ。こっちこそ、よろしく頼む。」

「…………ありがとう。…………良ちゃん。」

八月の帰り道。

もう日はとくに落ちていたけど、八月の夕暮れは十分に暑く、汗もかいて、制服はもうベトベトだったけど、それでも俺達は、ずっと抱き合っていた。

あれから、七年。

今まで、本当に色々な事があった。

大学に入り同棲を始めた。結婚生活みたいで、楽しかった。そりゃあ喧嘩もした。でもその後には抱き合って、でもまた喧嘩して…………二人で一緒に歩いて来た。

本当に楽しい七年間だった。本来は大学に入れた事すら奇跡の俺だが、

早苗の助けもあり、無事に卒業できる。

そう思っていたのに…………。

「……………良ちゃん？聞いてるの？」

「あ、ああ。」

「それで、良ちゃんはどうしたいの？」

「……………。」

どうしたいの？

と、言われても困る。

早苗の今後の事を考えると、俺達は別れたほうが良いだろう。

俺はこれから、全ての事を忘れ始める。

学校、友人、父さん、母さん、そして……………、早苗の事も。

早苗には俺と違って未来がある。

この先、俺よりもずっと良い人を見つけられるかもしれない。  
だから、

「別れよう。」

そう言いたかったのに、

頭では解っていたのに、

無意識に馬鹿で自分勝手な俺は、

「早苗、俺はお前とずっと一緒にいたい。」

と、言ってしまった。

そしたら早苗は、こう言ってくれたんだ。

「……………よかった。別れようとか言われたらどうしようと思ってたよ。」

予想外だった。

早苗は俺が間違って言ってしまった言葉を待っていたようだ。

「ど、どうして?。」

「何が?。」

「どうして早苗は、そんなに笑えるんだ?俺はもうすぐ、お前の事を忘れてしまうのに!?。」

「……………良ちゃん、私は、たとえ良ちゃんに忘れられても、良ちゃんの事が好きだよ。だから、……………好きだから、良ちゃんの事をずっと想っているから、大丈夫なの。」

「……………で、でも。」

「でも、じゃないの。大丈夫だよ。二人で頑張ろう。」

「早苗……………。」

いくら、

「忘れない」

と心に誓っても、忘れる時はやって来る。

でも、

「早苗が好きだ」

という気持ちは、忘れないでいよう。

二人でも、

辛いかもしれない。

悲しいかもしれない。

苦しいかもしれない。

でも、俺は君が好きなんだ。

僕が世界を忘れて、

世界が僕を忘れても、

それでも僕は君を想う。

（後書き）

皆さんこんにちは。来々です。今回は久しぶりに恋愛物を書いてみました。如何だったでしょうか？これからも色々なジャンルを書いて行きたいと思いますので、今後ともよろしく願います。次回も、ご期待下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5732b/>

---

それでも僕は君を想う。

2010年10月12日04時17分発行